

福岡

EVENT WIDE TOPICS

九州共立大(北九州市)スポーツ学部の木寺英史准教授(55)は、約2年前から、体育教員を目指す学生に、「武道論」を通じて勝利至上主義の功罪を問う取り組みをしている。幼少期に虐待を受けた人が親となって我が子に虐待を加える傾向があるのと同様、体罰にも連鎖があるのではないかと。学生と会話中、ふと感じた疑問がきっかけだった。

【関東晋慈】

「これまで体罰を受けたことがない人は」。1月14日にあった講義でジャーシー姿の学生約80人を前に、木寺さんが尋ねると、挙手したのは女子水泳部員1人だけ。また、昨年6月に同学部新入生(約320人)対象のアンケートでは回答した159人中約4割の65人が「体罰的指導が必要」と答えた。その半数以上は強豪校からの推薦などでの入学で「強豪校出身ほど、体罰を容

体罰対策④ 連鎖を絶つ

認する傾向があり、体罰の連鎖を絶つ必要がある」と木寺さんは強調する。

木寺さんは筑波大在

の体育教員になった。

着任早々、校長に呼ばれた。「たいてい指導してください」。当時、教育現場には、体罰を容認する雰囲気があり自身も体罰をする側にいた。その後、生徒と話す機会があり、どんなにつらかったか反省。以来「教育に暴力が入り込んでほしくない」と決して手を出

「体罰」を挙げ、小中高校時代に自らも受けたことがあるという。講義に体罰を取り上げる必要性を痛感。担当する「武道論」「スポーツ指導論」はともに半期15コマ(1コマ90分)あり、主に3年生対象の武道論に、体罰をテーマにしたカリキュラムを組み込んだ。

14日の講義は、元本市立中学剣道部で昨年発覚した体罰、大阪市立桜宮高体罰事件(2012年)——などを題材にした。当時の新聞記事やニュース映像なども使い勝利至上主義について考えた。

木寺さんは、技を磨くことによっての武道の人間形成の側面に言及。「勝利ではなく、自分の限界を乗り越え

たら生徒のことをまず第一に考えたい」と話す。体育教育に詳しい立命館大産業社会学部の原尻英樹教授(武道的身体論)は「日本の体育教育は戦前の軍隊式指導、精神主義を残し、教員は大会の成績で評価される。社会問題も合わせて考えた教員養成が欠かせない」と指摘している。

木寺さんは、技を磨くことによっての武道の人間形成の側面に言及。「勝利ではなく、自分の限界を乗り越え

たら生徒のことをまず第一に考えたい」と話す。体育教育に詳しい立命館大産業社会学部の原尻英樹教授(武道的身体論)は「日本の体育教育は戦前の軍隊式指導、精神主義を残し、教員は大会の成績で評価される。社会問題も合わせて考えた教員養成が欠かせない」と指摘している。

木寺さんは、技を磨くことによっての武道の人間形成の側面に言及。「勝利ではなく、自分の限界を乗り越え

九州共立大
木寺英史准教授

勝利至上主義の功罪問う

人間形成に言及「絶対視」見直して

学中、全日本大学剣道優勝大会(団体)で準優勝するなど輝かしい実績を残してきた。卒業後、福岡県内の中学

さなくなった。高専などを経て2年前、同大に。早速、ゼミ学生に関心があるテーマを聞くと、多くが

口野球選手、松井秀喜さんが高校球児として出場した夏の甲子園(1992年)での5打席連続敬遠や、大分

ることが大切。部活、スポーツで勝敗を絶対とする考え方を見直してほしい」と話した。文部科学省の「運動

部活動の在り方に関する調査研究報告書(13年5月)は「大学は指導のための研究を積極的に進め、その成果を教員の養成、指導者の資質向上に生かすことが期待される」として

木寺さんは、技を磨くことによっての武道の人間形成の側面に言及。「勝利ではなく、自分の限界を乗り越え

新
教育の森

九州・山口

運動部活動の在り方に関する調査研究報告書

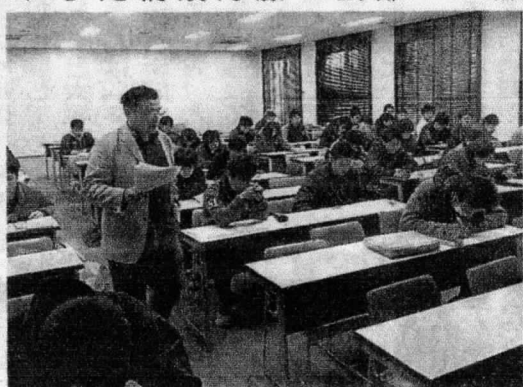


バスケットボール部主将が体罰を苦に自殺した大阪市立桜宮高の事件(2012年12月)を受けた調査で、文部科学省

が昨年5月にまとめた。「学校教育法で禁止されている体罰を厳しい指導として正当化するような認識があるとしたら、それは誤り」とした上で、生徒にとってのスポーツの意義や目的、科学的な指導力向上などを提言した。

が、やはり許されないと感じた。教員になっ

教員養成課程の学生らに勝利至上主義の功罪を話す木寺准教授



で他大学も実践してほしい」と評価する。

木寺さんは、技を磨くことによっての武道の人間形成の側面に言及。「勝利ではなく、自分の限界を乗り越え